

福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第15号 2011年10月31日 発行

目次

* 福沢研究センター公開講座……………	2	* 主な新収資料……………	8
* 中津市アーカイブズ講座……………	4	* 研究活動ニュース……………	10
* 上原家資料調査……………	6	* 主な動き……………	11
* 版木の整理……………	7	* センター諸記録（2011年4月～9月）……………	12



* 福沢論吉自筆 時事新報社説原稿 *

福沢論吉が日刊新聞を経営していたことは、研究者にとっては常識でも、今日では実はあまり知られていないかもしれない。いうまでもなく明治15年3月1日に創刊された『時事新報』がそれである。新聞創刊以来、福沢の執筆スタイルは大きく変わった。それ以前は、必要に応じて随時筆を執り、入念に推敲を重ねた原稿を発表することが多かったが、『時事新報』創刊以降は、多くの社説を書く必要に迫られ、時には福沢自身が音を上げるほど、執筆に追われる生活となった。新聞創刊以前の著作の原稿は、比較的福沢の手許に残されて現存しているが、日常の『時事新報』社説の原稿は基本的には全く手許に残されなかった。今日現存する社説原稿は、記者や社員が持ち帰ったり、頼んで譲り受けたりしたもので、普段は棄てられていた。宮武外骨は、明治18年冬頃、ある古本商が道端に店を出し、福沢の社説原稿1通に20銭の値段を付けて売っていたと伝えている。

逆に言えば、現存する社説原稿は福沢の筆跡として珍重されたものなので、巻物に仕立てられたり、掛け軸にされたりしているのだが、今般福沢研究センターが入手したこの時事新報社説原稿は、新聞社で活字を組む工程を終えたままの姿を留めている希有な例である。福沢の几帳面な筆で記された「富豪の要用」（明治25年12月掲載）と題する原稿の内容はともかく、欄外には活字を拾う植字工の分担を示す大きな記名があり、植字工一人分ずつ原稿を切り分け、版組後それをコヨリで綴っている。タイトルの右上に見えるのは、当時「総編輯」と呼ばれていた編集長の伊藤欽亮^{いとうきんすけ}を指す「伊藤」という印で、彼がルビ振りを終えた時に捺したものと思われる。資料がどのような形状で今日に残されているかという点も、その資料の性質を考察する上では実に興味深く、また重要な情報である。（都倉）



福沢研究センター公開講座 「新聞人・福沢諭吉に学ぶ—『時事新報』の大災害社説」

慶應義塾大学大学院アートマネジメント分野講師 鈴木 隆 敏
産経新聞社前顧問

地震、津波に原発事故が重なった東日本大震災からすでに半年余を経たものの、いまだに数万人が避難所生活を強いられ、死者・行方不明者は約2万人を数えている。私は9月末岩手県遠野市を訪問、知人の博物館関係者の案内で陸前高田市などの被災現場を訪れた。津波で大きく破壊されたままの建物、山積する瓦礫の山また山、すべてを失ってさら地と化した町…しばしば呆然と立ちすくんだ。この先どれほど時間がかかるのか見当もつかないが、ひたすら一日も早い復興を祈った。この間民主党政権は、不毛な権力抗争に時間を費やし「何もしない」と批判され続けたが、福沢諭吉の創設した『時事新報』は120年も前に「大災害対策」を繰り返しキャンペーンしていた。そのまま現代における災害対策として通用するものが少なくなく、今なお学ぶべきことの多い問題提起である。本稿は日吉に新設された公開講座「近代日本と福沢諭吉Ⅰ」で、私が2011年6月6日(月)に行った講義抄録に『時事新報』震災社説の主要部分を加えてまとめ直した。

大震災時における『時事新報』の救済キャンペーンと義捐金活動の社説は、明治24(1891)年10月の岐阜県、愛知県を中心にした「濃尾大地震」関係と、明治29(1896)年6月、岩手県・釜石町沖の大地震発生により同県と青森県、宮城県などを襲った「三陸大津波」とがある。濃尾大地震は明治新政府になって起こった最大の自然災害。10月28日、岐阜県と愛知県を中心に発生し、マグニチュード8・0、死者7232名、家屋の全壊約14万戸—と伝えられている。福沢はまず10月30日付けの『時事新報』で自ら筆をとり、社説「大地震」を執筆した。

「おととい発生した大災害の被災者を救うのは日本国中同胞の至情、義務である。新聞社などの義捐金募集が行われるだろうが、それだけでは足りない。被災地以外の地方の予算を、被災地に提供することはできないだろうか…中央政府は被災地の状況を把握し、医師の派遣、被災者の眠食を手当てすることに国庫金を早急に支出して救助に尽力すべきである。国会の承認はあとで必要だが…政府は躊躇なく救助に全力を尽くすべし」(要旨)

翌31日の社説は「震災の救助法」と題して説いている。「被災地救援には是非とも国庫金の支出が必要だ。臨時国会召集が必要との意見もありうるが、急を要する現況下では事後承認でいい。最近の議会は政府になんでも反対だが、これについて反対するなら本紙は徹底的に反撃するので、政府は安心してほしい。救助にあたっては何より

迅速が重要…無名の寒村こそ救助が必要である」(要旨)

『時事新報』は今日でいう“災害救済キャンペーン”を張るように、連日の社説と一般記事でさまざまな角度から大震災対策、復旧復興支援の論説と報道を展開した。社説だけ拾っても合計22本。11月以降の日付けと見出しは以下のようなものである。

11月1日「地震は建築法の大試験」▽3日「震災救助の手段いまだ十分ならず」▽4日「松方大臣の帰京を待つ」、「古着古道具の義捐」▽5日「災害地の医薬なお足らざるべし」▽6日「同胞の感情を表すべし」▽7日「震災善後の法」▽8日「震災の救助は政府の義務にして、これを受くるは罹災者の権利なり」▽10日「義捐者の氏名」、「負傷者を東京へ護送しては如何」▽11日「外国人の感情を如何せん」▽13日「救済の勅令」▽18日「義捐金及び物品の分配」▽29日「緊急命令及び予算外支出問題」▽12月11日「岐阜人民の請願」▽25日「震災地方は今正に災害の最中なり」▽29日「国会解散して政府の方向は如何」▽25年1月8日「被災地の手当ては遅々すべからず」▽21日「震災地方民の難渋」▽22日「震災地の工事」

3日の「震災救助の手段いまだ十分ならず」では、政府に迅速な対応を求める一方、民間にも救援と募金箱の設置を呼びかけた。4日は「古着古道具の義捐」として、寺院などが積極的に被災者へ贈るよう提唱した。5日の「災害地の医薬」では医師と医薬品の派遣に加えて、慈善家と医師による“ボランティア活動”を訴えていた。8日の「震災の救助は政府の義務…」は出色の論説だ。今回の政府対応への批判に通じるものがある。

「この度の災害につき政府は大いに国庫金を支出して救助のことを施行すべし…政府は常に社会の害毒を除きてその秩序を保ち、人民の生命財産を守護することを専一の義務となし…禍災に遭う者あるときは、政府はできるだけの力を尽くしてこれを保護するの義務あるものと知るべし…岐阜愛知の人民は他の日本人と同じく、法律に従って政府に租税を納め来たりし者にして…今日かかる不慮の災厄に遭遇したるに臨んでは、罹災の人民より大いに政府に向かい救助を請求するの権あること明らかなり」(要旨)

三陸地震は29年6月15日夜、岩手県釜石町沖を震源として発生し、それに伴う大津波が岩手県を中心に宮城、青森県などの沿岸部を襲った。マグニチュード8・2～8・5。

夜間だったため被害が拡大し、福島県を含めた太平洋沿岸の死者は約3万名に上った。『時事新報』の大規模災害における集中報道と義捐金の募集は磐梯山噴火（21年）、濃尾地震に続いて3度目だった。このため三陸大津波に関する社説は6月21日の「海嘯に就て富豪大家の奮発を望む」と27日の「目下の急を救ふ可し」の2本だったが、津波についての科学的な分析記事や過去の事例報道など関連記事は他紙を圧倒した。とりわけ新聞社別の義捐金募金額は、濃尾地震時も三陸大津波時も『時事新報』が全国でトップだった。27日の社説は日清戦争後の好景気で富を得た実業家たちに、被災者救援を呼びかけた。「現今実業の発達に伴って銀行や会社の資本は合計5億円にも達しているという。株主である富豪大家の人々が、仮にその百分の一を寄付したとすれば500万円になる。富豪大家が奮発すれば救済は容易であり、慈善の志を表する得がたき好機会なり」（要旨）

福沢はこの2年後に脳溢血で倒れ、新世紀を迎えた34（1901）年2月に長逝した。最晩年は自分で社説を書くことはなかったが、「福沢先生の新聞」への信頼が募金額にあらわれ、「日本一の時事新報」への評価につながっている。（『『時事新報』と濃尾地震、三陸大津波』については、本年6月号『三田評論』の「福沢諭吉と震災」で特集している）

ジャーナリスト・福沢諭吉が創設した『時事新報』は“不偏不党”の精神を貫く、わが国で初の中立な言論新聞だった。福沢存命中に掲載された社説と漫言（政治、社会時評）の総数は、昨年末発刊された『福沢諭吉事典』によるとざっと4000本にのぼる。その中から私は福沢の思想を代表し、現代に通じる論説として次の二本を紹介する。

第1は明治18（1885）年3月16日付けの社説「脱亜論」だ。福沢は封建江戸期から明治にかわった日本の近代化を進めるため、西欧社会への仲間入りが必要だと考えた。「日本は明治維新で西洋近時の文明を取り入れたが、隣の中国、朝鮮は古くから儒教にとらわれ近代化を拒否している。日本にとっても不幸なことで、我は心に於いて亜細亜東方の悪友を謝絶する」（要旨）と主張した。しかし「脱亜論」は福沢執筆後日清、日露戦争などもあり、長い間問題にされなかった。最初に言及したのは先ごろなくなった歴史学者の遠山茂樹・横浜市立大学名誉教授。半世紀以上を経た太平洋戦争後に、著作『福沢諭吉の思想と政治との関連』（昭和45年、東大出版会）などで「福沢の脱亜論の特色は帝国主義への適応に積極的姿勢をとったことだ」などと指弾した。近代日本の国づくりに尽力した人々を描き続けた歴史小説家・司馬遼太郎も「福沢諭吉には瑕瑾（かきん）がある。人によっては玉に瑕（きず）どころじゃない、とみる。明治18年3月、彼が主宰する時事新報に書いた『脱亜論』である」（平成3年、文藝春秋社『この国のかたち3』）と批判した。

最近でも京都大学教授・佐伯啓思氏が、昨年2月15日

付『産経新聞』の時事コラム『日の蔭りの中で』で、「福沢は日本でもっともはやく朝鮮からの留学生を受け入れ、朝鮮独立派を強く支援した。にもかかわらず朝鮮独立運動が失敗するや、彼は手のひらを返したように朝鮮への支援を排し、「脱亜入欧」を説く。アジアの悪友との交際は遮断すべきだ、というのである」と指摘した。『脱亜論』をめぐる最大の誤解は「脱亜」と「入欧」がセットになって受け止められていることだ。しかし実はそうではない。日本の政治思想史研究第1人者で“福沢惚れ”を自認していた故丸山真男・東大名誉教授は「よく脱亜入欧といわれるが、福沢は脱亜とはいっても“脱亜入欧”という言葉は一度も使っていない」（平成2年、日本学士院論文『福沢諭吉の「脱亜論」とその周辺』）と報告している。これについては坂野潤治・東大名誉教授が『福沢諭吉選集』第7巻に「福沢の東アジア政策論には、朝鮮国内の改革派援助という点で一貫性がある。（改革派が敗れたあとの）脱亜論は福沢の敗北宣言にすぎない。これをもって福沢のアジア蔑視観とかアジア侵略論の開始という評価ほど見当違いなものはない」（要旨）と解説したものが、最も的を得ていると私は思っている。

もうひとつの『帝室論』は『時事新報』発刊直後の15年4月に、12回にわたって連載され「帝室は政治社外のものなり」と訴えた長文の社説である。自由民権運動が華やかだった当時、『東京日日新聞』の社主、福地源一郎（桜痴）が国会開設などを巡って“漸進論”をとり、「立憲帝政党」を組織して自由民権運動のグループと対立した。福沢は帝政党や東京日日新聞が尊王主義を掲げて他党を非難中傷するのを危惧し「皇室を政治に利用すべきではない。皇室は現実政治とはかかわりなく高く仰ぎ見る存在とすべきだ」と主張した。

平成20年5月30日、慶應義塾福沢研究センターの開設25周年記念講演会で、寺崎修・武蔵野大学学長（前福沢研究センター副所長）は次のように講演した。

「帝室はあくまで政治社外のもので、学問教育の振興、日本固有の藝術の保護など、国民の福祉、文化的事業の中核となって、国民統合の役割を果たすべきだ」と福沢は主張した。しかし福沢の真意は長い間理解されず、逆に帝室を軽視するものとして、各方面から批判されもした。ところが、太平洋戦争後いまの新憲法が制定されると、福沢の所論は現憲法下の“象徴天皇制”の精神と合致することから、一転して再評価されるに至った。今上天皇が皇太子だった時、東宮教育参与となった故小泉信三はこの『帝室論』をテキストとして使い、若き皇太子と輪読した。福沢は1世紀も前に“象徴天皇制”を示唆していた」

私は平成20年11月8日、慶應義塾創立150年記念式典（日吉）に今上天皇、皇后陛下がご臨席されお祝いのお言葉を賜ったことは、この『帝室論』と無縁ではないと思うのだがいかがであろうか。

平成23年度 中津市アーカイブズ講座

本年度も昨年に引き続き、8月8日(月)から12日(金)まで、大分県中津市主催のアーカイブズ講座が市立小幡記念図書館で行われ、別府大学、九州大学、慶應義塾福沢研究センターの三大学から、大学生・大学院生・教員など合わせて53名が参加した。講座はほぼ次の4つの作業で構成されている。

1) 読解・目録作成作業

昨年度までに福沢家および小田部家の襖から剥された文書を対象に、解読と目録の作成を行った。襖の下貼りに利用されていたという性質上、文書の多くは損傷が激しく、内容の解読も困難であった。しかし関連性のある文書はある程度まとまって現れることが多く、例えば私が担当した文書の多くは藩政に関わる日誌などであり、研究の進展次第では、幕末期中津藩の藩政のあり方の解明の手がかりとなるかもしれない。

文書はくずし字で書かれており、別府大学や九州大学の学生とお互いに協力して読解していく作業となった。それでもTAや先生方にアドバイスを頂く場面も多く、自らの力不足を痛感させられ、今後はくずし字読解の技術をより磨いていきたいと気持ちを新たにさせられた。

目録を作成していく作業では、資料名のつけ方や、目録に書き留めるべき点はどこかなど、資料に関する歴史的理解と技術が必要とされた。目録は中津市に提供されるため、誰が見てもわかりやすい目録を作成するよう気を配った。

(佐藤史帆)

2) 襖の下貼り剥し

2日目から講師の尾立和則氏の指導の下、中津市内自性寺の襖・屏風の下貼り剥しの作業を行った。襖や屏風の下地には地域で記録された廃棄文書が使われており、近年、従来の地域史を再検討するための貴重な史料として注目されている。

下貼り剥しの作業は、解体、剥離、同定の3段階の手順で進められる。まず、解体では、襖に整理番号を付し、襖の寸法と状態を写真やスケッチで記録する。続く剥離では、外側に貼られている紙から順に下地の各層を剥し、各層に貼られている文書の状態を写真やスケッチで記録した後、紙片ごとに番号札を付ける。最後に同定では、各紙片が1枚ものの断片であるのか、版本や帳簿等で綴られていたものかを精査する。今回の作業では、解体、剥離の作業を行い、自らの手で下貼り文書を剥すという貴重な

体験をすることができた。下貼り文書の中でも中間の層に位置する裏掛けの層からは「安政五年正月吉日 御通御納所様」と書かれた小帳が発見され、近世期の地域史を研究する上で貴重な史料になることが期待できる。今回剥した下貼り文書は来年度以降のアーカイブズ講座の実習で利用されることになっている。

(星野高德)

3) 写真撮影作業

今回の講座においては、目録整理作業等の合間を利用し、班ごとにローテーションを組み、デジタル一眼レフカメラを使用して、実際に襖の下貼りに使用されていた文書の撮影に当たった。

まず、別府大学の針谷武志教授より、デジタル一眼レフカメラの操作方法と撮影に当たっての注意点に関するレクチャーを受けた。この中で、撮影に使用する場所の光量に応じた、カメラのシャッタースピードと絞り等の調整が特に重要であることが示された。

その後は、こうしたポイントに注意しながら、班内において、史料撮影・撮影時の史料の位置調整・史料の出纳、の三つの担当に分かれて撮影を行った。班内の全員が前記三つの役割を全て経験できるよう、数枚の撮影でこの担当は交代した。慣れない作業のため、当初は手間取ることも多かったが、その後徐々にペースは上がっていった。

こうした資史料の撮影は、本講座の場のみにとどまらず、各自の研究分野における史料調査等に際しても必要となってくる作業である。それだけに、今回改めて実習を経たことは、本講座の参加者にとって大きな収穫となるだろう。

(藤沢匡樹)



4) 講義

別府大学丑木先生：アーカイブズ世界の歴史と現状の解説。専門家育成と制度充実が必要になるというご指摘などから、改めて今は資料保存について新しく問われていると感じた。

慶應義塾大学西沢：福沢諭吉の人物像と中津との関わり。福沢の中津に対する想いが、郷里への思慕と恨みというアンビバレントなものと考えられるという内容から、当時福沢の複雑な心境は合理的なだけではなかったのだらうと想像した。

元京都造形大学尾立先生：襖の下貼り文書について作業工程も含め襖の全体構造を中心に解説。襖の構造や作業実践とともに、資料への認識や考え方について多面的な見方があるということを学んだ。

九州大学名誉教授ミヒエル先生：江戸期のものの収集など歴史を振り返りながらコレクションとは何かについて、その持つ役割や意味についてじっくりと考えるきっかけになった。(二宮一弘)

初参加の4名は、こうした作業経験を通じて、多くの知識を得ることができたと思う。また昨年に引き続き参加した3名も、さらに充実した成果を得た。以下3名の感想である。

今年も講座の初日は所用と重なってしまったため、2日目から参加した。昨年は4日間で整理できた文書は20点程度に止まったが、今年は1日平均約20点の史料をこなすことができた。作業の能率が格段に向上したのは、班のメンバーを固定したことでグループとしての一体感が生まれたことによる面が大きかったように思う。史料の内容は藩の勤務日誌が多かったが、昨年はスケジュールの初日に組まれていた福沢旧邸の見学を作業の合間に入れたことも、古文書を習いたての参加者には気分転換

となり良かったのではないかと。宿舎では大学院生の研究報告を聴くこともでき、昨年よりも一層中身の濃い4日間になった。(堀和孝)

今年は福沢旧居の襖下貼り文書の目録が完成し、小田部家史料の目録作成に着手した。福沢諭吉の叔父にあたる渡辺弥市の書簡など、福沢家の状況を把握するための貴重な史料が史料整理の過程で見つかった。

また、今年は宿舎にてTAを中心としたくずし字の解読実習や研究報告が行われ、活発な議論や質問が飛び交い、昨年以上に充実した内容となった。今年のアーカイブズ講座は、班編成を整えたほか、受講者の増加により昨年以上に史料の目録化が捗ったことが重要な点であろう。来年度は小田部家史料の整理に本格的に着手することから、更なる福沢関係史料の発見と作業の進捗が期待される。(大庭裕介)

昨年に続いて2度目の参加となった今年の講座では運営面に変化があった。昨年の実習は個人で作業するか、グループで行うか、日によって異なっていた。そのため個人間の実習内容にバラつきが生じていた。一方で今年は最初に全体を6つの班に分け、以後一貫して班単位で活動した。具体的には、各班が文書の解読・目録作成、襖の下貼り剥し、文書の撮影の3つに分かれて実習を行い、1コマごとにローテーションしてゆく方式が採られた。これは班員相互の把握や協力という点で有効で、全体的な作業のペースアップに繋がったと思う。また受講生が様々なことを満遍なく学べるようにもなり、講座が一段と有意義になる一因であった。(横山寛)

例年のことになるが、本講座は大学間の日程調整など準備に大変手間がかかる。実行に至るまでには、中津市歴史民俗資料館の平田由美氏および竹内奈央氏の多大なる尽力がある。参加者一同心からお礼を申し上げたい。



戦没した慶應義塾出身三兄弟の遺品調査—長野県安曇野市・上原家資料—

都 倉 武 之

福沢研究センターでは、昨年より小泉基金の研究助成を利用して、慶應義塾出身のある兄弟の資料調査を継続している。上原良春（1915-1945）、龍男（1918-1943）、良司（1922-1945）の三兄弟である。三人の略歴を紹介しておこう。

上原良春は大正4年、長野県の医師、上原寅太郎の長男として誕生。昭和8年松本中学を卒業、同年慶應義塾大学医学部予科に入学し、次いで学部（本科）に進学、在学中に陸軍依託学生となり昭和15年3月に卒業した（三四会18回生）。直ちに陸軍軍医となり、ハルピン、新京、シンガポールなどへ転任。昭和20年9月24日ビルマ・トンゲー野戦病院において戦病死した（没後軍医中佐）。

上原龍男は大正7年、寅太郎次男として生まれ、昭和10年松本中学卒業。昭和11年慶應義塾大学医学部予科、14年学部に進み、17年9月に卒業した（三四会21回生）。医学部助手に任用されたが直ちに海軍軍医見習尉官となり、海軍潜水学校を経て昭和18年9月3日伊号第一八二潜水艦乗艦中、米護衛駆逐艦と交戦、ニューヘブリズ諸島付近で撃沈され戦死した（戦没認定10月22日、没後海軍軍医大尉）。

上原良司は大正11年生まれ、寅太郎三男で、昭和15年松本中学卒業。医学部進学を希望するも果たせず、昭和16年慶應義塾大学経済学部予科に入学、18年10月に学部に進学するが学徒出陣となり、12月に陸軍入隊、熊谷陸軍飛行学校を経て特別攻撃隊第56振武隊員として、昭和20年5月11日鹿児島県知覧より出撃、沖縄県嘉手納沖で戦死した。

3人の戦死により、上原家には2人の妹清子、登志江が残された。陸軍軍医で安曇野に医院を開業していた父寅太郎は跡継ぎを失い、戦後婿養子を取って医院を継がせたが、上原家の風景は一変してしまったのである。

同家には現在、兄弟の幼少時代から戦死に至るまでの遺品が大切に保管されている。福沢研究センターでは、これら現存する遺品を目録化しておくことを上原家に提案、快諾を得た。昨年11月の予備調査を経て、本年6月、9月、10月に資料調査を行い、今後も継続する予定となっている。

この調査が行われるきっかけとなったのは、義塾創立150年記念「未来をひらく福沢諭吉展」において上原良司の残した「所感」と題する遺書の借用を上原家にお願したことである。その際、長年上原良司を研究されている亀岡敦子氏にご仲介いただき、その後同氏と上原清子氏の対話の中で、調査の道がついたものである。

当センターの調査では、三兄弟の遺品を中心としながらも、上原家のファミリー・ヒストリーを資料の存在から記録出来ればと思っている。

現在、三兄弟のうち上原良司は、突出してその名を世間に知られている。それは彼が残した遺書が、戦歿学生の手記を集めた『きけわだつみのこえ』（岩波文庫）の巻頭に掲げられ、広く共感を生んだことによる。現在で

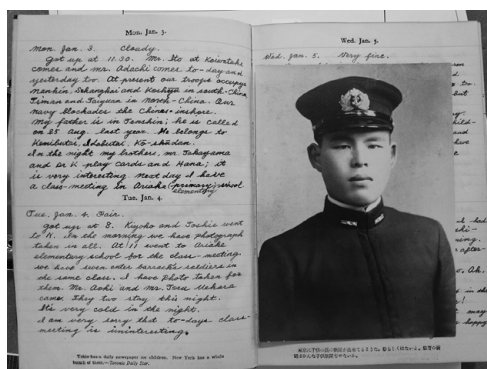
は生家跡や安曇野一帯を臨む山麓に彼の記念碑が建つほどである。しかし良司の遺書が「自由主義者」と自称する驚異的な内容から注目される一方で、彼が育った環境や家族の存在は必ずしも十分顧みられず、良司像が一人歩きしているきらいもあるように感じられる。上原家にとっての戦争の悲劇は他の兄二人とともにあり、そして残された家族の歴史もあったのだ。

これまでの調査で目にした遺品から感じられるのは、兄弟いずれにも、ごく自然な習慣として「表現する」ことが身についていたことである。長兄良春は、あまり私事を書き残していないが、多くの写真で義塾に、四谷に学んだ日々を活写しており、次兄龍男は、日常の思索を日記や戯画で残した。良司もまた日常の思いをまめに記録し、身边を郷里の父母に手紙で報告した。清子氏によれば父寅太郎は常々「手紙に返事をしない者は犬畜生以下だ」と口にしていたという。その父の父、すなわち兄弟の早世した祖父良三郎（1866-1907）は小学校教師であったが、三川の雅号で知られる正岡子規門下の俳人であった。戦前戦中の義塾に学び、率直に表現する術を持っていたこの兄弟が、何を思い、どう生きたかを伝えていくことに、この調査が資することができればと願っている。

なお本調査の参加スタッフは以下の通りである。
吉岡拓、徳永暁、中村稜、横山寛、都倉武之



在学中の上原良春（前列右端）と同級生



塾生時代の龍男の英文日記と挟まっていた軍装写真

慶應義塾所蔵福沢諭吉著作等の版木群—100年の時を経て、今—

慶應義塾大学文学部非常勤講師 平 塚 泰 三

長らく慶應義塾内に保管されながらその詳細が未明であった福沢諭吉著作等の版木群について、昨年度、機会を得て保存処置と整理に従事した。件の版木群は、慶應義塾図書館旧館地下1階階段下に大小8つの木箱に入れられていた(註1)。現状およびその来歴から勘案し、これらの版木は太平洋戦争前に箱詰めされ、学内各所を転々としながら戦後旧図書館地下に落ち着き、未調査のまま今日に至ったと推測される。恐らくは、この度の処置を経て初めてその全貌が詳らかになったものと思われる。福沢は自ら塾内で出版業を手掛け、それ故、慶應義塾には福沢やその門下生の著作版木が大量に残されていることが知られる。そして、このたび処置をした版木群はその一部を構成するものである。ちなみに、これらの版木群の学術的意義については今後の研究を待ち、本稿では版木の保存処置と分類の経緯について報告する。

かかる版木群が使用後約100年を経ても大量に一括して保管されていたことは、文化財保護および研究上、喜ぶべきことである。しかしながら、福沢研究センターから保存と整理について相談を受け、現状を確認した際には、版木を収納している木箱の一部が損壊し内部の版木に塵埃がつもり、湿気をすった塵埃が凝固し黴が発生した痕跡もみられた。それ故、最低限の保存処理後に、適切な保管場所へ速やかに収納するため、人員・作業場の確保、用具の調達といった一連の作業に着手した。

さて、このたび処置をした版木の総数は約2200枚強である。管財部から作業場となる教室の提供を受けたうえ、学生諸君の協力を得て年末から春休みにかけ延べ30日くらいの日程で作業を行った。簡単な処置ではあるが、碎片を含めて全ての版木の塵埃を刷毛ではたき上げながらダイソン社製掃除機で吸引し、版面の細部に付着した汚れを綿棒で取り除き、同時進行で、塵埃吸引後の版木を、水分を含むネル布を使用し拭き上げていく作業を行った。防塵マスクとゴーグルを着用し一人最低100枚程度の処置にあたったが、保存処置の専門設備があるわけでもないため、作業従事者たちの疲労度は予想以上だった。

保存処置とともに効率よく分類整理に取り掛かるべく、各人が拭き取り後に版木に彫られた著作タイトルと頁を用紙に記入し、その用紙で版木を挟んで段ボール箱に収めた。それらの版木は、燻蒸後に、三田キャンパス内収蔵庫に一時保管され、虫損や腐食、逸失といった懸念がなくなったことは幸いである。つづいて収蔵庫内にて著作別の分類が始まる。主だった著作タイトル別の箱を用意し、そこに版木を入れてゆく。破損した版木もあるため全版木のタイトルが判明したわけではないが、破片版木は破断部分が合うものを一つにまとめてタイトルを調べ分類した。幸いにして破片になっていた版木は少なく、タイトル未明の破片版木は数点しか残っていない。その結果、今回分類された版木から福沢諭吉の著作が20タイトル、福沢門下生等の著作が22タイトルほど

判明した。各タイトルについては註1の都倉氏の論考に詳しいが、福沢諭吉の著作版木のうち『童蒙教草』は300枚弱、『訓蒙窮理図解』・『世界国尽(素本)』は約150枚、『洋兵明鑑』は約100枚と相当の枚数が纏まって伝存していることは注目に値する。

さらに興味深いことに、今回整理したほぼ全ての版木が、両面にある版面が片面ずつになるように木口で2つに切断されている。都倉氏は、これらの版木が、戦災で焼失した旧幼稚舎の天井板に転用されていたとの推測をされている。この点については、版木に残る釘跡や記録などから判断して妥当な推論だと思われる。ただし、現状では2面に分割された版木の切断面全体に墨が浸透しており、これは切断後に意図的に墨を塗布・含浸したものとみられ、その理由については今後検討の余地がみられる。

最後に、これらの版木整理の今後の展望について述べたい。今回整理した版木以外にも、冒頭で述べたように慶應義塾には福沢やその門下生の著作版木が学内数カ所に分蔵されている。それらはタイトル・枚数が明らかなものもあれば、未整理のものもある。今後は、これらの版木群の著作タイトル・頁を明らかにし学内に伝存する福沢諭吉著作等の版木群の総目録を作成することが目標とされる。また、作業の進行に伴い適切な保存処置を施すことは言うまでもなく、そのうえで望ましい保管方法を検討することが必要であろう。

註1：都倉武之「福沢諭吉著作等の版木について—その現状と来歴—」(『MediaNet』No.17(2010.11) 慶應義塾メディアセンター)



版木の塵埃除去の作業風景

主な新収資料

平成23年3月から平成23年8月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の主なものを紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきましたが、すべての資料をご紹介することができず、申し訳ありません。

(物故者敬称略)

福沢諭吉関係資料

■『時事新報』社説原稿「富豪の要用」

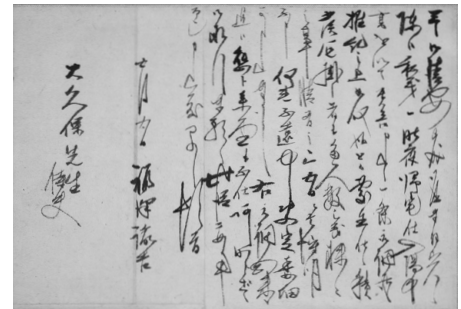
⇒表紙参照【購入】

■大久保一翁宛書簡 明治11(1878)年カ5月5日付 1幅

【購入】

大久保一翁は幕臣で、外国奉行や大目付を務め、明治維新後は東京府知事も務めた。明治10年からは元老院議員。この書簡は、新発見の資料である。これまで大久保一翁宛は、明治11年4月12日付および同年6月1日付の2通が知られていた。4月12日付は、慶應義塾の敷地や建物の概要を示し、資金繰の厳しさから公共物としての存続を訴えたもので、『福沢諭吉全集』編纂時には明治12年の発信と考えられていた。しかし勝海舟の日記によれば、福沢は明治11年に徳川家に対し、慶應義塾の維持資金借用について打診していることから、11年の発信であると確定された(『考証福沢諭吉』下、岩波書店、1993年、478頁)。また6月1日付は福沢から大久保へ『通貨論』を贈呈し、『民間雑誌』の廃刊を知らせたもので、『通貨論』の刊行は明治11年5月、『民間雑誌』廃刊もやはり11年5月のことであり、この書簡も明治11年の発信であることがわかる。

今回新発見の書簡は、一昨夜に帰宅し「入湯中」に書面で答えた事について取り調べ処理しようと思っていたが、発兌掛の事情も様々で「三五日」では埒が明かないので、決定したら委細を知らせるという内容で、これだけでは具体的な事柄がわからない。「入湯中」の言葉から福沢が好んで通った熱海か箱根に4、5月の時期に行っている年(『福沢諭吉事典』Ⅵ表象旅行地図参照)、「発兌」の言葉から5月ごろに何かを刊行している年、大久保の歿年(明治21年)などを考慮すると、発信年は明治11年ではないかと推定される。

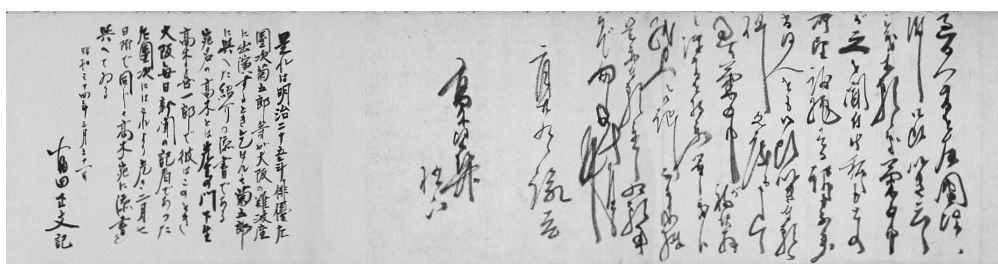


■高木喜一郎宛書簡 明治25(1892)年2月29日付 1巻

【吉村 洪氏寄贈】

高木喜一郎は中津藩士の子に生まれ、明治2年慶應義塾入塾、卒業後慶應義塾出版局勤務や教員を経て、時事新報に入社し、明治22年春に本山彦一の推薦で大阪毎日新聞社に移り、翌年には取締役となって手腕を発揮した。その後大阪毎日新聞は、それまでから一転して奇跡といわれるまでの業績をあげた。26年社長であった渡辺治が若くして歿し、高木がそのあとを継いだ。この書簡の内容は、大阪難波座で講演する尾上菊五郎への支援を頼み、ただし新聞紙面には菊五郎が福沢の添書を持参したことは書かないよう告げている。福沢はこれより前に、同様に市川左團次への支援を依頼する書簡も書いている。若いころの福沢は芝居に興味がなく、興味がないどころか「醜惡」とさえ考えていたが(明治8年4月24日付島津復生宛書簡)、明治20年3月にふと思立って新富座で本格的な歌舞伎を鑑賞したところ、感激して以後すっかり芝居好きになった。当時大人気であった市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次との交流も始まり、「何芸にても日本一と申者は微妙に入るもの多し」(明治23年7月8日付山口広江宛書簡)と述べている。

この書簡はこれまで内容は知られていたが、原本の所在がわからず、平成13年から15年にかけて『福沢諭吉書簡集』(全9巻、岩波書店)が刊行された際にも、校訂作業ができないままになっていた。今回、吉村氏より寄贈を受け、それが可能になった。吉村洪氏は、昭和35(1960)年に慶應義塾文学部国文学科をご卒業後、36年4月から平成15(2003)年3月まで、慶應義塾中部で国語科教員として教鞭をとられた。この書簡は近年入手されたとのことで、卷子仕立になっており、富田正文による跋文(昭和34年3月31日付)がある非常に貴重な資料である。



福沢諭吉門下生・慶應義塾関係資料

■ 黒田吉治（吉次）関係資料 48点

【黒田康敬氏寄贈】

黒田吉治は明治15（1882）年2月23日生まれ。長野県下伊那郡飯田町（現長野県飯田市本町）出身で、明治31年3月23日入学。入学時の記録（慶應義塾入社帳）および明治期・大正4、5年の卒業生名簿（塾員名簿）では吉次。筆名として「宇宙生」も使用している。塾生時代は高橋誠一郎、金沢冬三郎らとともに自尊党、革新同盟団の一員として活動していた。自尊党は福沢諭吉の三男三八らによる学生グループ。革新同盟団は、福沢諭吉の提唱によって結成された、塾生の中心となって気品を高め塾内の風紀取締を行う学生組織。明治31年秋ごろになると、塾生たちのなかに、慶應義塾の気風の刷新をはかり独立自治を果たそうという意見が高まり、社頭福沢諭吉や塾長鎌田栄吉の許可を得て、学制自治規約が定められた。その規約に基づき、各級から委員を選出して組織された議決機関が自治制委員会で、その実質的な風紀取締機関となったのが革新同盟団であった。吉治は明治40年に理財科を卒業すると、その後飯田で材木商を営んでいる。昭和41（1966）年9月24日歿。

今回康敬氏から寄贈を受けたのは48点で、自尊党や革新同盟団のメンバー、飯田三田会などの写真や、福澤三八、諭吉の孫にあたる中村愛作、高橋誠一郎らの書簡など貴重な資料である。塾生時代に当たる明治32年1月から35年2月までの金銭出入帳も含まれ、自転車をレンタルしているなど塾生生活の様子を窺うことができる。



レクチュア倶楽部記念写真

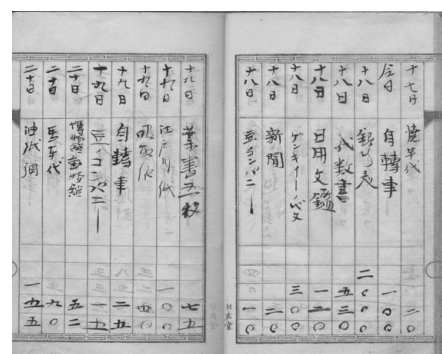
■ 体育会スケート部メダルおよび塾生使用のバッチ 計7点【谷本明穂氏寄贈】

「CARNIVAL」（表面）「体育会スケート部 昭和2年12月」（裏面）とあるメダルほか。慶應義塾内で行われた「塾内対抗競技部」に関する資料と思われる。

■ 慶應義塾大学医療班腕章 1点

【石川輝子氏寄贈】

医学部の卒業生で軍医としても従軍し、のち慶應義塾大学病院産婦人科に勤務、都立深川産院に出張勤務中、昭和20年3月10日に同院で亡くなった杉浦長一郎の遺品。



金銭出入帳

時事新報関係資料

■ 時事新報社宛馬場孤蝶受領書 大正12年4月11日付 1通

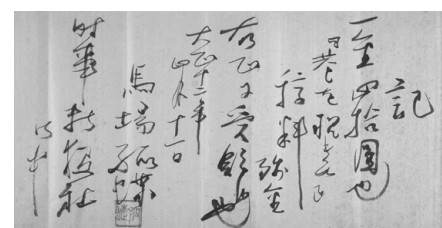
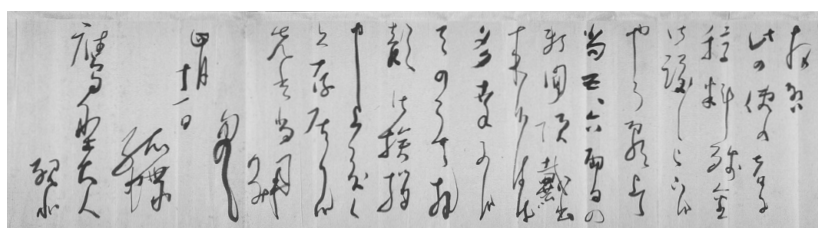
【購入】

馬場孤蝶は英文学者・随筆家。明治2年11月8日、高知生まれ。19歳年上の兄馬場辰猪は初期の慶應義塾生で、福沢が多いに期待を寄せた人物であった。孤蝶は明治学院の出身、明治39年から昭和5年までは慶應義塾で教鞭を執った。この資料は、時事新報社宛の原稿残金40円の受取証で、これを持参し引き換えに原稿料を受け取ったようである。下記の書簡とあわせて裏打ちされている。

■ 「鷹野」宛馬場孤蝶書簡 〔大正12年〕4月11日付 1通

【購入】

この書簡を持参する者に原稿料の残金を渡してもらいたいと依頼したもので、上記受取証に添えられたと思われる。「鷹野」は時事新報社の社員で金銭出納を担当していた者か。



■ 馬場辰猪自筆資料を入手

福沢がその人物の気品を愛した門下生で、早世の自由党系民権運動家として知られる馬場辰猪（1850-1888）の自筆原稿4綴りを、福沢研究センターが古書店を通じて入手した（6月1日）。馬場の自筆資料は極めて乏しく、当センターに所蔵されるのは初めて。『馬場辰猪全集』に収録されている自伝や日記原本も、現在では所在がわからなくなっており、名書簡として知られる英国留学中の馬場に宛てた明治7年10月の福沢書簡も写真しか所蔵していない。今回入手した原稿は、稿本で伝わる「英国証拠法述義」の一部などで、出所も確かなことから自筆と判断された。ただし、他筆と思われるものも含まれていることから、今後資料の性格について精査を進めていきたい。



センターに収蔵された馬場辰猪の原稿

■ 柏崎吉田家（黒船館）旧蔵資料整理に着手

新潟県柏崎の呉服店花田屋の当主で慶應義塾出身の吉田正太郎（1887-1971 書斎号黒船館）と、その弟で慶應義塾幼稚舎長を務め、キリシタン史研究でも知られる吉田小五郎（1902-1983）の旧蔵資料のうち、来簡や自筆原稿の多くが昨年福沢研究センターに寄贈されたが、その整理作業が開始されている。当面は数千通に及ぶ来簡類の整理が進められる予定だが、今後諸方面の関係者にも協力を仰ぎながら、全体像の把握に努めていきたいと考えている。

■ 門野幾之進記念館リニューアル準備に協力

三重県鳥羽市にある門野幾之進記念館のリニューアルが進められており、この準備に福沢研究センターが全面協力している。門野幾之進（1856-1938）は、明治2年慶應義塾入社、教頭や副社頭の重責を担い、慶應のアカデミズムや学事制度確立に貢献、その後実業界に転じて千代田生命を創立、わが国保険業界の発展にも大きく貢献した。現在の記念館は昭和59年、千代田生命が主体となり開設されたが、展示内容が古くなったことから、幾之進孫進一氏の尽力でリニューアルされることとなった。新装開館は11月28日の予定。

■ 阿部家資料の寄贈

明治生命の創業者として知られる福沢門下生阿部泰蔵の四男章蔵（作家水上瀧太郎 1887-1940）を中心とする阿部家の資料が寄贈された（3月22日）。この資料群は昨秋開催された創刊百年記念三田文学展の際、章蔵長男優蔵氏が三田文学学会に寄託した資料と、阿部家に残されていた資料とからなる。永井荷風、泉鏡花など三田文学同人関連の資料のほか、家族間の書簡、章蔵の子煩悩ぶりを伝える写真アルバム、親戚関係にある小泉（信三）家との交遊を示す資料など、章蔵のプライベートな側面を伝える資料もまとまっている。また、阿部泰蔵宛福沢書簡も確認されている。今後、既に寄贈されている小泉家の資料との関連も重視しながら整理作業を進める予定である。



福沢伝来品と同型の乳母車（小林恵氏蔵）

■ 福沢家伝来の米国製乳母車と同型車を国内で確認

慶応3年、福沢がアメリカ土産として持ち帰った乳母車の同型車を、アメリカ人形収集家小林恵氏が所蔵していることがわかった。同氏は1979年にバーモント州の収集家から譲り受けたという。その調査によれば、第30代大統領カルビン・クーリッジが幼少期に使用していたものも同型車で米国フォード美術館に現存する。小林氏所蔵品は11月17日～12月6日、銀座4丁目ミキモト本店6階ホールで開催の「子供たちに愛されたアメリカ人形」展に展示される。

■ 新刊紹介

吉岡 拓『十九世紀民衆の歴史意識・由緒と天皇』

去る5月末に拙著『十九世紀民衆の歴史意識・由緒と天皇』（校倉書房、2011年）を上梓した。丸山眞男「超国家主義の論理と心理」（『世界』5、1946年）以来、日本のアカデミズムの世界で近代天皇制に関する研究は数多く生まれてきたが、その多くは近代天皇制イデオロギーの国民統合機能の強烈さを指摘する一方で、統合される対象である民衆が、実態として、どのような過程を経て天皇制イデオロギーの中に取り込まれていった（あるいは、取り込まれなかった）のか、という点については、ほとんど議論されることがなかった。拙著では、19世紀の京都を事例に、民衆の歴史意識や彼らが語る自家の来歴＝「由緒」の変化を検討することで、上述の問題の解明を目指した。「近代天皇制の冷徹な観察者であった民衆達が、それゆえにネーション・ビルディングの一翼を担うこととなる」という拙著の結論（380頁）が、民衆を「被害者」としてしか見てこなかった斯界にどのように評価されるのか、非常に楽しみである。

（当センター研究嘱託）

■ センター公開講座

昨年に続き、日吉で開講している「近代日本と福沢諭吉Ⅰ」において、6月6日に鈴木隆敏氏（大学院アートマネジメント分野講師、産経新聞前顧問）、6月20日に清家篤塾長、6月27日に福沢 武氏（三菱地所株式会社相談役）の3名をゲスト講師として招き、履修者以外にも公開した（鈴木氏の講義概要はp.2～3）。

■ 大阪での福沢研究センター講座

2008年度から大阪リバーサイドキャンパスではじまったセンター講座を本年度も開催することになった。『『文明論之概略』を読む』をテーマに、9月17日から12月17日まで4回の予定。講師は甲南大学法学部教授で当センター客員所員でもある安西敏三氏。

■ 中津市アーカイブズ講座

昨年に引き続き、夏休みを利用して8月8日から12日まで、大分県中津市主催のアーカイブズ講座が市立小幡記念図書館において開催された。センターからは、西沢直子教授・都倉武之専任講師とともに5名の調査員が参加した。他にも別府大学、九州大学から大学生・大学院生・教員など、合わせて53名の参加があった（詳細はp.4～5）。

■ 『慶應義塾150年史資料集』の編集状況

2008年に『慶應義塾史事典』、2010年に『福沢諭吉事典』が資料集の別巻として刊行された。細心の注意を払って編集を行ったが、これまでいくつかの誤りが見つかったので、両事典の正誤表をセンターのホームページに掲載した。

今年度からはいよいよ資料集本編の刊行となるが、センターでは第Ⅰ期全4巻の編集を同時並行で行っていくこととし、別巻編集には滞っていた各巻の編集委員会を4月から再開した。今年度は第1巻となる「塾員塾生資料集成」の刊行を予定しており、入社帳、勤務表、姓名録を使って、明治期の人名から塾生・塾員の動静がわかる検索ができるようデータを整備中である。

■ ワークショップの開催

8月に「近世から近代における神道の歴史の変遷」をテーマとした近世近代研究交流会との合同ワークショップを開催した。また、8月3日、5日、31日、9月7日の計4回、調査員を対象に資料整理のためのワークショップを行った。調査員には2011年度から新たに加わったメンバーもあり、カードの取り方や資料の収納方法などに不統一が生じないように、マニュアルの確認を行った。最初の2日間は、その実習として、まだ古い事務封筒に入ったままの資料を、中性紙の封筒や箱に入れ替えながら、すでに作成されたカードの内容を確認した。また後半の2日間は、新潟県柏崎市の吉田家より寄贈あるいは寄託を受けている資料について、書簡を中心に、中性紙封筒への封入とカードの作成を行った。

■ 上原家調査

センターでは資料調査を継続して行っているが、東日本大震災の影響で延期されていた長野県安曇野市の上原家調査を6月29日から7月1日まで、9月14日から16日まで行った。上原家調査は、今後も継続調査の予定である。

講演会・シンポジウム開催のお知らせ

【講演会】

日 時 : 2011年10月29日(土) 午後2時～午後4時
会 場 : 慶應義塾大学三田キャンパス 三田演説館
講 師 : 松沢弘陽氏(前国際基督教大学教授、北海道大学名誉教授)
演 題 : 『福翁自伝』を読みなおす ― 私にとっての福沢諭吉 ―

* 入場は無料です。事前の申込みは必要ありません。

【シンポジウム】

日 時 : 2011年11月17日(木) 午後1時～午後4時
会 場 : 慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール
基調講演 : 松沢弘陽氏(前国際基督教大学教授、北海道大学名誉教授)
パネリスト : 小林多寿子氏(一橋大学教授)
松田宏一郎氏(立教大学教授)
都倉武之(慶應義塾福沢研究センター)

* 入場は無料です。事前の申込みは必要ありません。

30分間の基調講演のあと、各パネリストからそれぞれ20分間のご報告をいただき、その後会場からのご質問も含めて、全体的な討論を行う予定です。パネリストの小林先生は経験社会学、ライフストーリーの文化社会学的研究がご専門で、日記や自伝を題材に多くの論文、著書があります。昨年8月には『ライフストーリー・ガイドブック ― ひとがひとに会うために ―』(嵯峨野書院)をまとめられました。また松田先生は、日本政治思想史がご専門で、福沢に言及された論文も多く、2008年には『江戸の知識から明治の政治へ』(ペリカン社)を上梓されています。

■ 諸会議

- *『慶應義塾150年史資料集』第1巻打合せ (5月25日)
- *『近代日本研究』第28巻打合せ (6月7日)
- *平成23年度第1回センター会議 (6月9日)
- *平成23年度第1回運営委員会 (6月29日)
- *小泉基金運営委員会 (7月19日)
- *平成23年度臨時運営委員会 (7月28日)
- *ワークショップ〈近世近代研究交流会と合同開催〉
「幕末維新期の政治・社会情勢と大宮氷川神社神主」報告者：朝矢嘉文 (早稲田中・高等学校教諭)／「氷川神社における教導職過程の教化活動と大成教会成立」報告者：徳永暁 (慶應義塾福沢研究センター調査員) (8月27日)
- *『慶應義塾150年史資料集』第4巻打合せ (9月6日)
- *『慶應義塾150年史資料集』第2巻打合せ (9月8日)
- *『慶應義塾150年史資料集』第3巻打合せ (9月9日)
- *コロナイプに関する勉強会 (9月9日)

■ 人事

- | | | | |
|--------|----|---------------|-------|
| 〈研究嘱託〉 | 新任 | 吉岡 拓 | 4月1日～ |
| 〈事務局〉 | 新任 | 山本真由美 (事務嘱託) | 4月1日～ |
| | | 高嶋 朱里 (事務嘱託) | 4月1日～ |
| | | 柄越 祥子 (非常勤嘱託) | 4月1日～ |

■ 主な来往

- *東北大学史料館協力研究員吉葉恭行氏、資料調査 (4月6日)
- *法政大学笹川ゼミ、施設見学 (5月6日)
- *梨花女子大学一行、施設見学 (6月14日)
- *日本医大唐澤信安氏、殿崎正明氏ほか1名、資料閲覧 (6月17日)
- *ミシガン州立大学清水さゆり氏、資料調査 (7月5日)
- *人形コレクター小林恵氏、乳母車の調査 (7月26日)
- *杉山茂氏 (塾員)、資料調査 (8月2日)
- *持丸文雄氏 (塾員)、所長と面談 (8月3日)
- *アリゾナ州立大学小畑悦子氏、資料調査 (8月19日)
- *イランのイマーム・サーデグ大学からファリードドッディン・ハッタードアーデル氏夫妻来訪 (9月12日)
- *堀越毅一氏、資料寄贈 (9月21日)

■ 出張・見学

- *西沢教授、岡山市山本家で資料調査 (4月6日)
- *都倉専任講師、阿部家資料の下見 (4月4日、8日、9月25日)
- *西沢教授、調査員2名、中上川家に資料引取り (4月12日、19日、5月17日)
- *都倉専任講師、山根非常勤嘱託、浅岡家に借用資料を返却 (4月13日)
- *都倉専任講師、大倉精神文化研究所にて岩波書店OBの竹田行之氏ほかの聞き取り調査に参加 (4月26日)
- *都倉専任講師、門野幾之進記念館リニューアル準備のため鳥羽 (5月10日～11日、8月17日～18日)
- *都倉専任講師、武見敬三事務所を訪問 (5月17日)
- *西沢教授、中津旧邸保存会評議員会 (5月19日)
- *都倉専任講師、資料貸し出しのためNHK (5月23日)
- *西沢教授、借用資料返却のため奥野法律事務所を訪問 (5月24日)

- *清野係主任、全国大学史資料協議会東日本部会 (6月3日)
- *西沢教授、明治維新史学会大会 (6月11日～12日)
- *都倉専任講師、寄贈資料の受け取りのため大阪 (6月16日～17日)
- *都倉専任講師、鈴木隆敏氏とともに門野家を訪問 (6月23日、9月5日、21日)
- *都倉専任講師、吉岡研究嘱託、調査員2名、上原家資料調査 (6月29日～7月1日、9月14日～16日)
- *米山所長、井上円了センター運営委員会 (7月5日)
- *米山所長、西沢教授、清野係主任、調査員、静嘉堂文庫の見学 (7月26日)
- *西沢教授、都倉専任講師、調査員、中津古文書講座 (8月8日～12日)
- *西沢教授、韓国女性史学会シンポジウム (8月23日～29日)
- *都倉専任講師、調査員1名、日吉寄宿舎の記録撮影、調査 (9月29日)

■ 講師派遣

- *西沢教授、信濃町 (慶應病院) 新職員オリエンテーションにて「慶應義塾と福沢諭吉、北里柴三郎」と題して講演 (4月1日)
- *都倉専任講師、中等部新入生向け授業を担当 (4月11日)
- *西沢教授、文学部授業にて「『福沢諭吉事典』を読む」と題して講義 (極東証券寄付講座) (4月15日)
- *西沢教授、商学部ガイダンスにて「福沢諭吉の男女交際論」と題して講演 (4月23日)
- *都倉専任講師、システムデザイン・マネジメント研究科の入学合宿で特別講義 (4月24日)
- *西沢教授、南九州連合関税会の会合にて「福沢諭吉における一身独立と人間交際」と題して講演 (5月20日)
- *都倉専任講師、SFC「慶應義塾入門」で講義 (5月27日)
- *都倉専任講師、福沢記念文明塾にて「福沢諭吉の身体危機状況を生き抜く」と題して講義 (6月2日)
- *西沢教授、日本経済思想史研究会で報告：「福沢諭吉と中津藩の儒学」 (6月4日)
- *都倉専任講師、西川ゼミ三兄の会三田会にて「福沢先生と災害救援」と題して講義 (6月11日)
- *西沢教授、都倉専任講師、福沢諭吉協会一日史跡見学会で三田キャンパスを案内 (6月18日)
- *都倉専任講師、群馬慶友会にて「福沢諭吉の文明論」と題して講演 (6月19日)
- *西沢教授、鎌倉三田会にて読書会の講師 (6月23日)
- *西沢教授、長篠城址史跡保存会歴史講座で「奥平家と福沢諭吉・小幡篤次郎」と題して講演 (8月20日)

■ 訃報

- *大学名誉教授、センター顧問飯田鼎君逝去 (5月10日)

■ その他

- *平成23年度福沢研究センター設置講座ガイダンス 三田 (4月13日)、日吉 (4月19日)
- *東日本大震災により一部破損していた地下洗面所通路の工事が行われる (5月3日～5日)
- *全塾を対象に会計検査院による実地検査 (5月23日～25日)
- *大阪にてセンター講座第1回を開催 (9月17日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第15号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2011年10月31日 (年2回刊)

編集
発行 慶應義塾福沢研究センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電話 03-5427-1603

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印刷 (有) 梅沢印刷所